

書けない生徒を書ける生徒にするための 小学校からの指導

—「スイミー」のあらすじ調査の分析から—

宮 武 里 衣

はじめに

拙稿（宮武 2021）で、定時制高校と進学校の生徒の書いた「スイミー」のあらすじ調査の結果から、学習に困難さを抱える生徒とそうでない生徒の文章表現の違いを検証した。その中で、学習に困難さを抱える生徒には、特有ないくつかの課題があることを言及したが、語彙について課題として挙げたのは、類義語・和語・漢語・外来語などの扱い方で、接続語には触れられなかった。

そこで、本稿では、接続語の使い方の点から「スイミー」のあらすじ調査を分析して、接続語を中心とした具体的な指導方法を提案したい。

I 調査の概要

ア 調査対象

- A 校 岐阜県内の市立定時制高校 1 年生
- B 校 岐阜県内の県立実業高校 3 年生
- C 校 岐阜県内の県立普通科高校 3 年生

A 校には何らかの軽度障害や中学までの長期欠席経験があったりして、学習に困難さを抱えている生徒が多い。B 校にはいわゆる地域の中間層が在籍しており、学習に強い困難さは抱えていない。C 校は地域有数の進学校で、学習に困難さを抱えている生徒は少ない。

いずれの学校の生徒も、小学校で光村図書出版の教科書での「スイミー」の学習経験がある。

イ サンプル数 各校 20 例。

ウ 方法

- ① 光村図書出版小学 2 年生用教科書『こくご二上 たんぼぼ』より「スイミー」本文を A4 用紙一枚で提示。分かち書き・漢字などは適宜訂正。
- ② 200 字の縦書き原稿用紙に「あらすじ」を書くように口頭で指示。
- ③ 読む時間も含めて 50 分間の授業の中で完了。

エ 調査時期 2020 年 7 月末から 8 月中旬。

Ⅱ 接続語の分類基準

接続詞は、同じ語であっても文中の位置によって文法的機能が異なる場合があるうえに、他の品詞との区別が明確ではないこともあり、定義は難しい。また、接続詞と接続語の定義も異なっている。

接続詞の定義を、石黒（2008）は「独立した先行文脈の内容を受けなおし、後続文脈の展開の方向性を示す表現」としている。接続語について、豊澤（2004）は「文章は、文と文との接続によって形成され、文脈を形作っていく、その結果、文脈は書き手の思考の展開を反映することになり、接続語はその指標として位置づくことにもなる」と役割を明示したうえで、「文章において、このような働きをもつものとしては、接続詞、接続助詞のほか、指示語、副詞、活用語の連用形中止法などが挙げられ、接続語の範囲は広くなる」と述べている。

そこで、本稿では、接続詞の定義としては石黒（2008）に従いながら、接続語の分類基準を次のようにすることとした。

- 1 接続語には接続詞と接続助詞を含む。
- 2 「～てしまう」「～ている」「～ていた」「～てきた」など、接続助詞「て」の直後が補助動詞の場合は接続助詞として数えない。
- 3 指示語、副詞、活用語の連用形中止法などは分類に入れない。
- 4 判断に迷うものについては『新明解国語辞典第八版』に従う。
- 5 文法的働きは『日本語文法大辞典』を基準とする。

Ⅲ 「スイミー」のあらすじ調査にみる接続語の使用

今回の調査で使用した光村図書出版教科書「スイミー」で使われている接続語は「のに、けれど、だけど、それから」の4語である。あらすじは一般的に本文の引き写しになることが多いので、今回の調査でも接続語は多く使われていないと想像できる。意識的に接続語を用いると以下の模範例のようになろう。

模範例

広い海に小さな魚の兄弟達が楽しく暮らしてた。兄弟は赤いが、一匹だけ真っ黒で泳ぐのは速いスイミー。ところが、ある日まぐろに兄弟達は飲み込まれ、スイミーだけが逃げた。スイミーは悲しんだが元気になり、自分のとそっくりの赤い兄弟達を見つけた。そこで、スイミーはいろいろ考えて、みんなで大きな魚のふりをして泳ぐ作戦を提案した。練習をしてできるようになった時、スイミーが目になり、そして大きな魚を追い出した。(198字)

接続語は、て（3個）、が（2個）、ところが、そこで、そして、の8個である。

また、文章の重要要素だけを抜き出して接続語でつなぐと、次のようになる。

- ①場面設定 一人だけ個性の違う魚スイミーは兄弟達と楽しく暮らしていた。
 ②逆接確定条件「ところが」 まぐろに仲間が食べられスイミーは悲しむ。
 ③前提接続確定条件「そこで」 スイミーは作戦を考える。
 ④累加「そして」 作戦成功して大きな魚を追い出した。

場面設定の後、逆接確定条件→前提接続確定条件→累加の接続語を文頭に置いて文をつなげていけば、まとまったあらすじにできる。ポイントになる接続語は「ところが、そこで、そして」である。

さて、生徒たちの書いたあらすじの接続語には、3校間に違いのあることもあったが、違いのないこともあった。そこで、ここでは文法的な要素別に共通点と相違点を述べることにする。

1 文・句点・文字の数

表1でわかるように、3校の文の数の平均値は5.6から5.8とほとんど差がない

表1 文・句点・文字の平均値

※ () 内は各校20例の総数

	文 (総数)	句点 (総数)	文字数
A校	5.6 (111)	4.9 (97)	176.1
B校	5.7 (113)	3.6 (72)	188.8
C校	5.8 (116)	5.2 (104)	194.8

にもかかわらず、句点の数の平均値は3.6から5.2と差が見られる。ただし学習への困難さとの規則性は、この値から結論づけることは出来ない。

文字数については、宮武(2021)で示したように、平均の違いよりも「制限字数より

少ない180字以下がA校で9例、C校で1例と大きく違いがある」ことが問題であろう。学習に困難さを抱える生徒には、制限の文字数に合わせて見直しをもって書くことを指導する必要がある。

2 接続語の数

表2のように、使われている接続語の数は、A、B校とC校の間に有意な差がある。この数値を見る限り、ある一定の学力レベルから接続語の使用が容易になる可能性が考えられる。

表2 接続語の平均値

※ () 内は各校20例の総数

	接続語	接続語なし
A校	2.9 (57)	2
B校	2.8 (56)	0
C校	3.4 (67)	0

また、A校では、接続語を全く使わないで書いていた例が2例あるが、そのうちの1例は、接続語の代わりに「ある日」「そこには」を文頭におくなどして、接続語に代用するものを使った例である。接続語の分類基準を変えると違った結果になることも想像できる。

3 使われている接続語

(1) 接続助詞「て」と「が」

表3 「て」「が」の使用 ※割合の分母は各校20例の接続語の総数、サンプル数は各校20例の中の数

	「て」の使用		「て」の 複数使用	「が」の使用		「が」の 複数使用
	総数	割合(%)	サンプル数	総数	割合(%)	サンプル数
A校	27	47.4	9	4	7.0	1
B校	22	39.3	6	3	5.3	1
C校	26	38.8	7	15	22.4	3

接続助詞「て」は、表3に示したように、A校では使われている接続語の47.4%と半数近くを占めていた。しかも全サンプル20例のうち半分に近い9例において「て」が複数使用されていた。1番多かった例は、接続語を7個使用しているうちの5個が「て」であった。

その中には、幼児が話す時の「おままごとやって、雨が降って、お外で遊んで、寒かった。」というように、前後の文節の接続関係を意識しないで「て」で繋いでいる例もあった。A17(アルファベットは学校、番号はサンプル番号)「他の小さな赤い魚たちを見つけて、黒いスイミーが目になって、大きな魚みたいになって大きなマグロをおい出した。」がそれである。できれば「見つける」行為の後は前提接続確定条件の「そこで」を使いたいところである。順接の接続助詞「て」は、別の接続語の方がより適当である場合でも、安易に使われていると思われる。学習に困難さを抱えている生徒への接続語の指導は、特に「て」に注意して、他の接続語を探すようにすると良いだろう。「て」の言い換えだけでも接続語の語彙を増やすことができるのではないか。

一方で接続助詞「が」はA,B校に比べてC校で多用されている。A校では4例、B校では3例だが、C校では15例である。複数使用は3校とも少ない一方で、表には記載していないが、1回以上「が」を使っている例はC校では12例で、A校の4例、B校の2例と比べると多い。C校では半数以上の生徒が1回以上「が」を使っていることになる。

C校の「が」の含まれた特徴的な例は、C2「彼らは、楽しい日々を過ごしていたが、ある日恐ろしいマグロが」である。「楽しい日々を過ごしていた」に続く接続語は、好学社の絵本『スイミー』では「**ところが**あるひ、おそろしいまぐろが」と「ところが」を使っていることからわかるように、逆接確定条件の接続語が望ましい。しかし、C校に限らず、この部分の全サンプルの接続語の使用

を見てみると、「が」を使っている例は2例、「が」以外の接続語を使っているのは、「しかし」2例、「でも」「けど」「すると」「そしたら」「そして」がそれぞれ1例で、「ところが」の使用は1例もなかった。

A1 「一匹きだけ黒色でした。**そして**、マグロが赤い魚を食べて、」

A2 「その魚の名はスイミー、泳ぐのは一番速い。**でも**ある日大きな魚が」

B2 「赤い魚たちと真っ黒なスイミーがいた。**しかし**、まぐろは一口で」

B6 「泳ぐのが誰よりも速かった。**すると**、お腹をすかせたマグロが」

B7 「一匹だけ真っ黒の魚が仲よくくらしていた**けど**大きなマグロに」

B13 「広い海できょうだいたちとくらしていた。**そしたら**おなかをすかせて」

C2 「彼らは、楽しい日々を過ごしていた**が**、ある日恐ろしいマグロが」

C9 「スイミーと兄弟の小魚達。**しかし**ある時、**突序**として現れたマグロに」

C13 「スイミーは初め兄弟たちと楽しく暮らしていた**が**、ある日突然まぐろが」

この部分の「みんなで楽しく暮らしていた」と「マグロに仲間が食べられた」という内容は逆接であるので、「が」も含めて、「しかし」「でも」「けど」などの逆接確定条件の使用は間違いではない。しかしながら、C校の生徒のような学習に困難を抱えていない生徒には、逆接の中でも場面転換の意味の強い「ところが」と「が」「しかし」の違いを指導して、よりわかりやすい文章を書くための推敲を心掛けるようにさせたいものである。

また、使用している接続語の全てが「て」と「が」であった例が、A校2例、B校3例、C校3例あった。接続助詞「て」と「が」は、接続語の指導の中で置き換え指導のポイントとなる語だと言えるであろう。

(2) 接続語の使用にみられる各校の特徴

「て」「が」以外で使われている接続語の主なものは表4のとおりである。

表4 使用されている接続語の主なもの ※数は各校20例の総数

	そして そうして	しかし	ながら ながらも	そこで	まず	ただ	すると
A校	8	5	0	0	0	0	0
B校	2	3	0	4	1	0	3
C校	3	3	3	2	0	1	1

ここに挙げた語についてだけ言えば、A校では「そして」の使用は多いが、それ以外のいくつかの語は使われていない。学習に困難を抱えている生徒の語彙が全体的に少ないことは想像に難くないが、思考の流れをスムーズにするために

も豊かに使えた方がよい。石黒（2008）は「接続詞が、文章を人に理解してもらおうとするとき、その印象を決定づけるもの」と述べている。

3校の使用例の違いを見てみると、「て」「が」「そして」「しかし」などは平易な接続語と、「まず」「ただ」「そこで」「すると」などは意識しないと使えない接続語と言え、意識しないと使えない接続語は取り立てて指導すべきである。

(3) 模範例との相違

Ⅲの冒頭で示した模範例のような「①場面設定→②ところが（逆接確定条件）→③そこで（前提接続確定条件）→④そして（累加）」というパターンで書いていた例は、全サンプルに1例もなかった。②を「ある日」で始めているサンプルがA校15例、B校13例、C校16例と多数あるので、「ある日」を逆接確定条件の接続語ととらえたとしても、模範例のような接続語の配置例は1例もない。③、④のどちらかに接続語を配置していない例ばかりであった。

接続語は定義が難しいため、模範例のようでなければ正しくないとは言えず、以下のように副詞や指示語を接続語として使っている例も、接続意識はあると言える。学習に困難さを抱えていない生徒には、副詞や指示語も含めた接続語の指導の必要がある。

B10「この作品の主人公はスイミーという小さな魚である。ある日、スイミー達は大きなまぐろに襲われ仲間達は全て飲み込まれてしまった。一匹残ったスイミーは一人さびしくらい海の中を泳ぎ、そこでおもしろいものや新しい仲間を見つける。スイミーはみんなであつまって大きな魚になりきる。しかし一匹だけ色の違うスイミーは目立ってしまった。そこでスイミーは自分を魚の目の役になり、ついにはまぐろを撃退させることに成功する。」

Ⅳ 学習指導要領における接続語の扱い

学習指導要領で接続語に関する内容は、全ての学年で「〔知識及び技能〕(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」の中に記載されているが、小学校1・2年、中学校2・3年には記載がない。

第3学年及び第4学年では「指示する語句と接続する語句の役割、段落の役割について理解すること」、第5学年及び第6学年では「文と文との接続の関係、話や文章の構成や展開、話や文章の種類とその特徴について理解すること」と示されている。そして中学校第1学年で「指示する語句の役割について理解を深めること」という指示があるだけになる。

「B書くこと」の中にも明確には書かれておらず、近しい記述としては、中学校第1学年及び第2学年の「語と語や文と文との続き方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫すること」ぐらいである。

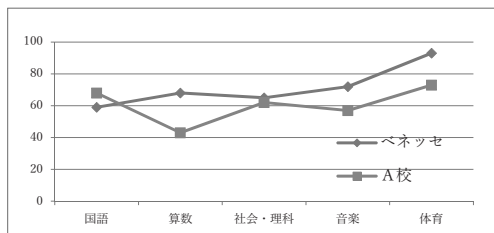
一方で、敬語が中学1年以外のすべての学年で記述があることと比べると接続語に関してはいささか手薄な感も受ける。学習指導要領の中で接続語の扱いが現状のようである理由については、今後の課題としたい。

V 接続語の指導の時期

A校には学習に困難さを抱えた生徒が多いが、困難さを認識する原因を探ると、宮武(2018)で述べたように、小学校では「算数」、中学校では「数学」と「英語」がわからなかったという経験が、強い印象として残っていることが明らかになっている。小学校では算数が、中学校では英語がわからないという意識が、全ての教科に波及して、「自分は勉強が苦手だ」とその後もずっと根付いてしまったのである。

グラフ1・2は2018年にA校で行った教科についての感情を尋ねたアンケートの結果である。

グラフ1 教科別「好き」と答えた人の割合(小学校)



ア 対象 1 から 4 年生のうち 82 名

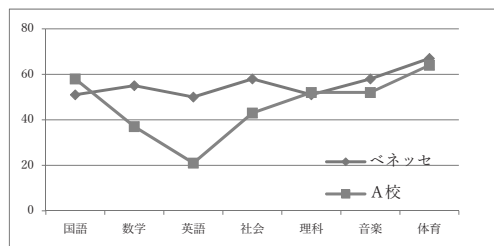
イ 調査時期 2018 年 11 月
ウ 比較した調査

『中学生・高校生の学習に関する意識・実態調査 2015「第5回学習基本調査報告書」』ベネッセ

エ 問「次の教科についてどんな感情を持っていましたか。小、中学校の時のことを思い出して答えなさい。」

オ 回答例「とても好き・まあ好き・あまり好きではない・嫌い」の四択。グラフの数値は「とても好き・まあ好き」の合計。

グラフ2 教科別「好き」と答えた人の割合(中学校)



グラフ1・2によれば、小学校でも中学校でも、ベネッセよりもA校の方が「好き」の割合の高いのは、国語だけである。小学校での算数、中学校での英語と比べてみるとその差は歴然である。高校では学習に困難さを抱える状態になっている生徒も義務教育の間の国語は「好きな」教科なのである。

「好きな」理由については、検証が必要であるが、「好き」という感情を大切に
した指導が、接続後についても、小学校から段階的に始められると良いと考える。

Ⅵ 小学校での接続語の指導例

1 接続語を使った自己紹介

- ①接続語を書いたカードを10枚準備する。
- ②児童にそのカードの中から4つ選ばせる。
- ③選んだカードを児童用ホワイトボードに貼らせる。
- ④選んだカードを文頭に置いた四つの文を作り、ペアで自己紹介をさせる。
- ⑤内容を自己紹介に限定せず、場所、品物の紹介などと広げる。

カードに使う接続語は、「そして」「だから」などの児童に馴染みの深いものから、「もしくは」「もっとも」「さらに」などの馴染みの薄いものまで、段階的に学べるように分類するとよい。

2 接続語で始める物語づくり

接続語を段落の頭に置いて、物語づくりをさせる。

- ①テーマを設定する。(例 中学年は「動物」などの具体物、高学年は「美しい世界」などの抽象的な内容)
- ②ワークシートに接続語を列記したワークシートを配布する。(中学年「だから、そして、しかし、でも、すると、また、それから、ところで、なぜなら、では」、高学年「(接続語としての働きのある副詞なども加える) さて、もしくは、あるいは、さらに、つまり、もっとも、ただし、ようするに」など)
- ③文頭に接続語を置いて四つの文で構成を考えさせる。
- ④③に文を補足して400字の物語を書かせる。
- ⑤グループで読み合って、相互評価させる。

以上は接続語を使った学習のほんの一部である。接続語は「知識・技能」の範疇だけでなく、「書くこと」や「話すこと・聞くこと」の中でも「考えの形成」のために使ったり、「構造と内容の把握」のキーワードとしたり、有意義な指導の可能性が残されている。

おわりに

今回、高校生の書いた「スイミー」のあらすじの中から、接続語だけを取り上げて、学習に困難さを抱えている生徒とそうでない生徒の共通点と相違点を取り上げた。その中で、接続語については小学校からの系統的な指導が必要であることに気づかされた。論理的思考力を伸ばすためにも接続語を中心に据えた指導は

有効であると思われる。今後、さらに研究を進めたい。

引用。参考文献

- ・宮武 (2021) 『月刊国語教育研究 2021・1月号』 日本国語教育学会 「書けない生徒と書ける生徒は何が違うのかー『スイミー』のあらすじ調査の分析からー」 p.p46-53 2021. 1. 10
- ・石黒 (2008) 『文章は接続詞で決まる』 石黒圭 光文社 2008. 9. 20 p27
- ・豊澤 (2004) 『国語教育辞典』 日本国語教育学会編 朝倉出版 2004. 11. 10 「接続語」 豊澤弘伸 p246
- ・『日本語文法大辞典』 山口明穂、秋元守英編 明治書院 2001. 3. 15 「接続語」 秋元守英 p378
- ・『新明解国語辞典第八版青版』 山田忠雄、倉持保男、上野善道、山田明雄、井島正博、笹原宏之編 三省堂 2020. 11. 20
- ・『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 国語編』 文部科学省 東洋館出版 2020. 2. 28
- ・宮武 (2018) 『月刊国語教育研究 2018・3月号』 日本国語教育学会 「学校設定科目の取り組みー国語の基礎・基本を学び直すためにー」 p.p50-55 2018. 3. 10

(みやたけ・りえ 美作大学准教授・本学大学院 1988 年修了)